

<2018年11月26日>

朝日新聞に掲載(全国版は朝日新聞デジタル)

<2019年2月19日(火)>

テレビ朝日ニュース番組

「グッド!モーニング」で放送。

<2019年2月24日(日)>

「サンデーステーション」で放送。

関心度アクセスランキング2位



※ 海底ハウスとは、フロンティアショップのオーナーSeiが暮らした海底10mにあった鉄製の家のことです。「海底ハウス 海底村」で検索してみてください。

# 「海底ハウス」夢の跡たどる

沼津市の内浦湾に1970年代、人が海中生活を体験することができた。「海底ハウス」があったという。今も海底に痕跡が残ると聞き、行ってみた。



ここが玄関

床面にある出入り口。海中からの来訪者はここからハウスの中に入った＝いずれも沼津市内浦長浜、堀口和重さん撮影

場所は同市内浦長浜の水族館「伊豆・三津シーパラダイス」の沖。内浦漁業協同組合に許可をもらい、漁協の船で向かった。一緒に潜るのは、漁協のガイド、シーパラダイスのスタッフ2人、カメラマン、記者の計5人。

水族館の沖約100メートル、水深

## トイレも設置



水深8メートルにある海底ハウス。便器が、人が過ごした痕跡を伝えている

## 沼津・内浦湾の水族館沖

8メートル。水が濁り、視界は良くなかったが、海底近くに確かに構造物がある。近づくと四角い鉄製の物体だ。目に飛び込んだのは洋式便器。「海底ハウス歩号二世」だ。見えているのは床から下の部分で、幅4、5メートル、長さは15メートルほどある。壁や天井といった上部は切り離して移動させ、魚礁として利用して

### 外部と連絡も



陸上と通話できた電話機が残っていた

## ミカン農家の田中さん建設 68年に「一世」で7日間生活

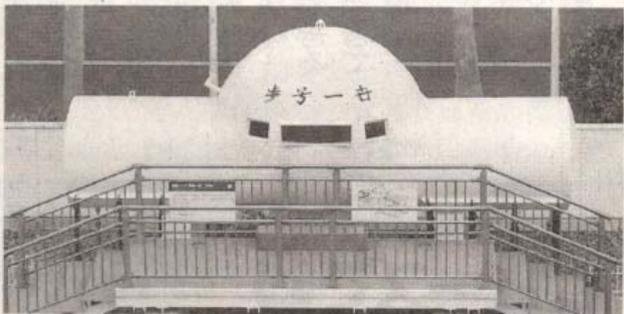
いるという。床には、潜ってきた訪問者がハウスに入るための出入り口がある。テレビ、掃除機、電話機、浴室用の蛇口。確かにこの場所です人が過ごしたことを伝えるものが残されていた。

海底ハウスを建設したのは愛媛県のミカン農家だった田中栄氏（1940～2011）。

68年に同県の吉田湾に沈めた「海底ハウス歩号一世」で7日間の海中生活実験に成功し、メディアに大きく取り上げられた。70年に一世を沼津に移設。74年にはさらに大型の二世を建設し、一般にも公開した。だが、76年、利用者がハウスからの帰路に死亡する事故があり、



「海底ハウス歩号二世」の内部  
田中清一郎さん提供



船の科学館に展示されている「海底ハウス歩号一世」＝東京都品川区

閉鎖された。

一世は現在、船の科学館（東京都品川区）に展示されている。学芸員の小堀信幸さんは「アポロ計画など宇宙開発競争が激しかった当時、海は第二のフロンティアとされた。個人の方で海中生活の夢を実現したことはすごい」と評価する。

田中氏の長男で横浜市港北区の会社社長、清一郎さん（52）は小学生時代に二世に滞在した経験がある。「海底ハウスから見た満月の美しさが忘れられない。窓の外では魚たちも月を見上げていた。海と一体になった」と懐かしむ。（岡田和彦）

デジタル版に動画